

迎春

福岡商品取引所
中村光広理事長



一

鈴木明夫
(鈴木 明夫 第一商品社長)

刮

松本 猛
(松本 猛 日本アクロス社長)

純

山本尚之
(山本 尚之 三晃商事副会長)

備

村上久広
(村上 久広 三貴商事社長)

義

龍男言
(沼野 龍男 北辰商品常務)

気

木村文彦
(木村 文彦 中部商品取引所理事長)

心

小林 健
(小林 健 豊商事常務)

努

中島秀男
(中島 秀男 第一商品副会長)

心

桐山共和
(桐山 共和 ハーベストフューチャーズ常務)

榮

岡本 昭
(岡本 昭 岡安商事会長)

凜

上田 勤
(上田 勤 フジトミ執行役員)

健

羽根田 茂
(羽根田 茂 アルフィックス取締役)

私の好きな一文字

平成16年掲載分(順不同)
肩書きは掲載時のままです。みなさんの「投書」、大歓迎です。事務局まで郵送をお願いします。

シニア・ラグビー

オリオン交易
専務 若村 郷



今、40歳以上のラグビーを通しての交流が盛んです。大体が「〇惑クラブ」とか、「〇惑大会」とか「40にして惑わず」の「惑」からとった大人の交流です。
年齢的な見分けも、40代が白パンツ、50代が紺パンツ、60代が赤パンツ、70代が黄パンツ、80代が紫パンツ、また世界に一人だけの90代のプレーヤーとして、名古屋に金のパンツの先輩がおられます。
このように年齢的にも、また、職業的にもいろいろな方が、皆グランドに集まると、少年時代に戻ったかのように喜々として目を輝かせてプレーを楽しんでおられます。
私も高校時代以来、途中

自分流

日本ファースト証券
専務 太田 清和



社会に出て、製薬会社に通勤、パテント商品の製造に従事し、粉末に塗れて働いていた頃、背広にネクタイ姿で働く姿に憧れていた。研究室に転属になり、白衣を着て仕事をしていた時は優越感を覚えた事を思い出す。その時の上司から「人の頭を踏み台にしても上上がれ」といわれ、サラリーマン社会は出世だと強く自覚させられた。
そしてその後、未知であるが将来性を捉えた商品取引業界に転職した。入社した会社に「至誠通天」と掲げられた社を見て、人の意を学ぶ事を教えられた。以来、「人を鏡」にして自分

ドライバー

東京コムウエル
専務 土門 昭男



ゴルフという名前のスポーツ(ゲーム?)に出会ってそれ以降、ドライバーショットの飛距離にすっかりとりこになって年月を重ねて来たように感じます。
フェアウエーの真ん中に、他の誰より遠い場所に自分のボールがあることは、何ともいえない爽快感に満たされるものです。スコアが良ければそれは最高で、たとえ悪くても、この快感のためにゴルフを何年も続けているのかもしれないと、ふと思ったりします。
趣味というほどではないのですが、車を運転することも好きなほうです。こちらのドライバーは、スピー

記憶に残る年

明治物産
取締役 宮崎 克世志



昨年は、原油、石油製品が中東、イラク、テロ戦争の長期泥沼から上場以来の最高値を更新し、日本国内の長引くデフレ退治に役買った海運、製鉄、石油関連、東工取、取引員などに恩恵。
ただ、戦間地域の犠牲者、特に一般市民の事を考えると早期に解決する事を、願わずには入れない。
30年前、私が当業界にお世話になり始めた昭和48年当時の第一次オイルショック時の環境と良く似て来ていると、感じるのは自分だけだろうか?
歴史は繰り返されるとすれば、中国は高度成長時代

勝利の食生活

ユニテックス
取締役 西 和哉



私は塩野七生の作品が好きでよく読みます。
特に戦記物と紀元前後300年のローマ帝国を舞台にした作品が気に入っています。
中でも初めて海を渡っての戦いから始まるハンニバル戦記は営業戦略のヒントがぎゅっ詰まっています。
これらの作品を読んでいて気付いたことは、ローマ人と日本人の食文化がかなり似通っているのではないかとこの点です。
カラスミは日本より歴史が古く、2,000年以上前から食されていたそうです。大カトー(ポエニ戦役時代のローマの大政治家)は別

鑑橋随想

(順不同)

池波正太郎

インター・ホールディングス
取締役 山口 一夫



趣味は?と聞かれると、読書ですと言う前に池波正太郎と答えてしまうほど大ファンである。残念ながら先年他界されて、新しい池波文学に出会えないが、残された作品は何度繰り返し読んで感動させられる。
池波正太郎の代表作は「鬼平犯科帳」・「仕掛人藤枝梅安」・「剣客商売」そして「真田太平記」を筆頭とした真田ものが即座に思い浮かぶが、その他にも男のダンディズムや食にまつわる著書も多数ある。
池波作品の共通点と言えば、人間・人情の機微を見事に表現することに集約されると言っても過言ではない。
興味は?と聞かれると、読書ですと言う前に池波正太郎と答えてしまうほど大ファンである。残念ながら先年他界されて、新しい池波文学に出会えないが、残された作品は何度繰り返し読んで感動させられる。
現代社会に於いては男女平等の問題等がとく物議をかよすが、池波作品は男女どちらが愛読しても、男や女という社会問題を超越できると思える。世はまさに、人権や権利という言葉が上滑りのようにまかり通っているが、そんな中で池波作品は、一服の清涼剤となると確信しているし、永遠に私の心の師のような存在でもある。